いしかり博物誌 105

黄金山の「源義経伝説」

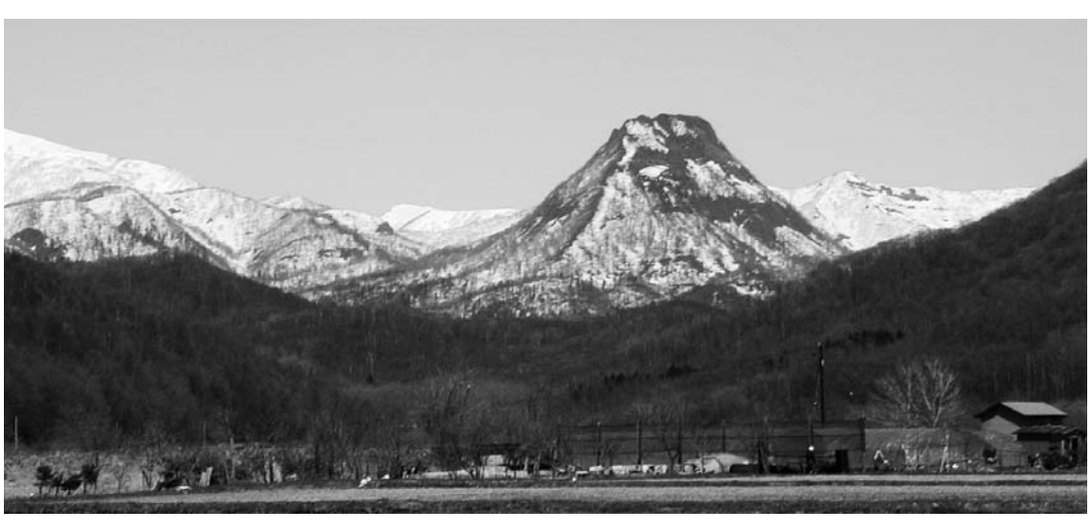
平成21年7月、国の名勝に指定された黄金山（アイヌ語名：ピンネタイオルシペ）には、二つの伝説が伝えられています。一つはユーカラの主人公である「ポイヤウンペ伝説」で、もう一つは「源義経伝説」です。「ポイヤウンペ伝説」は「黄金山にポイヤウンペの育ったチャシ（山城）があった」というものです。もう一つの「源義経伝説」は、幕末、浜益に来た探検家の松浦武四郎によって書き留められていて、「（この山は）義経公が住居し給いしと云、そのとき甲冑置かれしが、今化して蝮蛇に成有ると云伝えし」となっています。意味は、「黄金山は昔、源義経が住んでいたことがあり、そのとき鎧兜を置いておいたら、それがマムシになったとされている」です。二つの伝説は、一方がアイヌ民族のもので、もう一方は和人のものです。なぜ二つの伝説がここにあるのでしょうか。

源義経は文治5（1189）年に奥州衣川の高館（岩手県）で自刃した源氏の武将で、浜益はおろか北海道とも無縁のはずです。しかし、義経伝説は道内各地に伝えられています。なぜ、東北で死んだはずの源義経の伝説が北海道にあるのでしょう。その理由は、江戸時代、北海道に来た和人が各地で広めたからで、黄金山の伝説もその一つです。

義経の自刃は民衆の間では、「実は生きて、高館から弁慶たちと落ちのびた」と伝わり、江戸時代に入ると「竜飛岬（津軽半島の最北端）から蝦夷地（北海道）に渡った」となります。この形の伝説は本州で17世紀後半ごろに成立し、水戸光圀や新井白石も信じていたといいます。これが、蝦夷地に持ち込まれ、定着します。その時期は、サケや毛皮などを集め、本州に売る場所請負人が本格的に活動し始める17世紀後半か18世紀以降のことと考えられます。おそらく請負場所のアイヌ通詞（通訳）などを通して広められたのでしょう。

浜益区でも18世紀末には伊達家が場所請負を始めます。ですから、黄金山の義経伝説はこの時期以降伝えられるようになったのでしょう。しかも、内容を見ると「ポイヤウンペ伝説」を一部借用して創作された形跡があり、当時の和人とアイヌの文化の重なり方を知る上で興味深い例です。

（石橋孝夫）



黄金山（撮影は5月）

■文化財課・いしかり砂丘の風資料館
☎62-3711 ✉bunkazaih@city.ishikari.hokkaido.jp

ERIS「いしかり博物誌」は、えりすいしかりネットテレビ（http://www.i-eris.tv/）でもご覧いただけます。